

【今日の説教から】

このピリピ書は、エペソ、コロサイ、ピレモンへの手紙と共に、パウロによって獄中にて書かれた手紙です。

獄中にて、迫害と困難の中書かれた手紙に似つかわしくなく、そこには「喜びなさい」という言葉が繰り返し書かれています。

今日の箇所にも、「私の神に感謝」、「喜びをもって祈り」、「感謝している」、「良いわざを始められた方がそれを完成して下さるに違いないと確信している」という力強い信仰と感謝にあふれた内容となっています。

私たちが人生を歩むとき、順風満帆の時があれば、逆風の中を行くような、困難で辛い、何をやってもうまくいかない、どんどんと窮屈して先細りになっていくような、思うようにいかずに沈んでいくばかりのような、まるで牢の中にいるような思いに苛まれることがあるかもしれません。

良心を固く保って良き業を重ねてきたのにどうしてこのような仕打ちに会わなければならぬのかと、神を恨む気持ちが湧き起こることもあるかもしれません。

信じてずっと来たのにこのような目に合うとは、神様はそもそも存在などしないのではないかとの深い失望を体験することもあるかもしれません。

そのような心にこそこの獄中書簡の御言葉は響くものと思います。パウロは獄の中にあって何を見て、何を経験して、何を語るのか。信仰者の生き方を深く学ぶことが出来るのです。

皆様、おはようございます。

8月も最後の週となりました。相変わらずの暑さではありますが、朝晩はしのぎやすくなり、とんぼが飛ぶのを見かけるようになりました。

台風10号が水曜日頃、この辺りを通過する見込みです。ぜひともお気を付けください。

さて、ピリピ書に入りました。エペソ、コロサイ、ピレモン所と並び、獄中書簡と呼ばれます。

このピリピ書は、紀元61年ころローマにてパウロによって書かれたとされています。使徒行伝16章に、ピリピにて占いの靈に取りつかれた女性を自由にしたことから投獄されたとの記録があります。使徒行伝は紀元30年ころから30年余にわたる主の弟子たちを通して神様が働く記録です。ルカは緻密にその間の歴史を調査して書にまとめたわけですが、同時期に書をまとめたパウロもピリピの町のことを深く様々に思い返していたに違いありません。

あの使徒16章において、様々の混乱と迫害の中、神様はどのようにお働き下さって、現在のピリピの教会が出来上がったのか。パウロは獄中にて、ピリピの獄の中にあっても神様が輝かしくお働きになられ、その街に信じる人を起こされたことを思い返しながら、その後の

神様の働きを覚え、ここに獄中にあっても「感謝」という言葉を記しているのです。このピリピ書はしばしば感謝という言葉が記してあります。

困難の中にあっても、思うようにいかなくとも、失意とどん詰まりの中でも、不安と悲しみの中にあっても、神様はまたそのようにして悩み悲しむ信仰者たちに良くして下さらないことがあろうかとの深い確信に基づいてパウロはこの書を書きました。困難の中にあって悲しんでいるすべての人に、勇気と希望を得たい全ての人にお勧めするのがこの書です。

使徒 16:11 そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。

16:12 そこからピリピへ行った。これはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。わたしたちは、この町に数日間滞在した。

16:13 ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。

16:14 ところが、テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた。

16:15 そして、この婦人もその家族も、共にバプテスマを受けたが、その時、彼女は「もし、わたしを主を信じる者とお思いでしたら、どうぞ、わたしの家にきて泊まって下さい」と懇望し、しいてわたしたちをつれて行った。

16:16 ある時、わたしたちが、祈り場に行く途中、占いの靈につかれた女奴隸に出会った。彼女は占いをして、その主人たちに多くの利益を得させていた者である。

16:17 この女が、パウロやわたしたちのあとを追ってきては、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」と、叫び出すのであった。

16:18 そして、そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはてて、その靈にむかいで「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬間に靈が女から出て行った。

16:19 彼女の主人たちは、自らの利益を得る望みが絶えたのを見て、パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡すため広場に引きずって行った。

16:20 それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、

16:21 わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです」。

16:22 群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたてたので、長官たちはふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じた。

16:23 それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。

16:24 獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっか

りとかけておいた。

16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たち耳をすまして聞きいっていた。

16:26 ところが突然、大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまった。

16:27 獄吏は目をさまし、獄の戸が開いてしまっているのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思い、つるぎを抜いて自殺しかけた。

16:28 そこでパウロは大声をあげて言った、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」。

16:29 すると、獄吏は、あかりを手に入れた上、獄に駆け込んで、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏した。

16:30 それから、ふたりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」。

16:31 ふたりが言った、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。

16:32 それから、彼とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた。

16:33 彼は真夜中にもかかわらず、ふたりを引き取って、その打ち傷を洗ってやった。そして、その場で自分も家族も、ひとり残らずバプテスマを受け、

16:34 さらに、ふたりを自分の家に案内して食事のもてなしをし、神を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

16:35 夜が明けると、長官たちは警吏らをつかわして、「あの人たちを釈放せよ」と言わせた。

16:36 そこで、獄吏はこの言葉をパウロに伝えて言った、「長官たちが、あなたがたを釈放せるようにと、使をよこしました。さあ、出てきて、無事にお帰りなさい」。

16:37 ところが、パウロは警吏らに言った、「彼らは、ローマ人であるわれわれを、裁判にかけもせずに、公衆の前でむち打ったあげく、獄に入れてしまった。しかるに今になって、ひそかに、われわれを出そうとするのか。それは、いけない。彼ら自身がここにきて、われわれを連れ出すべきである」。

16:38 警吏らはこの言葉を長官たちに報告した。すると長官たちは、ふたりがローマ人だと聞いて恐れ、

16:39 自分でやってきてわびた上、ふたりを獄から連れ出し、町から立ち去るようにと頼んだ。

16:40 ふたりは獄を出て、ルデヤの家に行った。そして、兄弟たちに会って勧めをなし、それから出かけた。

このように、ピリピにて目覚ましいことを神様はパウロらを通して行われました。

「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」こう言いながら、パウロらの行くところを幾日も追ってくるこの女性の中に、自分が救われたいという思いを見出したのでしょう。パウロらはそうしたら面倒なことが起こるかもしれないからと避けてはいましたが、ついには困り果てた挙句に、その靈にむかひ「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言うと、その瞬間に靈が女性から出て行きました。

16:19 彼女の主人たちは、自分らの利益を得る望みが絶えたのを見て、パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡すため広場に引きずって行った。

16:20 それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、

16:21 わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです」。

16:22 群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたてたので、長官たちはふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じた。

16:23 それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。

16:24 獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかりとかけておいた。

これこそが彼らの危惧していたことでした。主人たちは、彼女のことなどどうでもよく、ただ金儲けが大切だったのです。彼女はただただ利用されているだけで、例に取りつかれて過ごしている状態である辛さや悲しみなどというものに主人はお構いなしでした。しかし「いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝える」主の弟子に出会って、彼女の人生は変わったのでした。しかしそのよい業のためにパウロと知らすとは投獄されてしまいます。鞭で打ちたたかれ、獄に入れられ、足かせにつながれるのです。

16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいっていた。

16:26 ところが突然、大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまった。

16:27 獄吏は目をさまし、獄の戸が開いてしまっているのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思い、つるぎを抜いて自殺しかけた。

16:28 そこでパウロは大声をあげて言った、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」。

16:29 すると、獄吏は、あかりを手に入れた上、獄に駆け込んで、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏した。

16:30 それから、ふたりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」。

16:31 ふたりが言った、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。

16:32 それから、彼とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた。

16:33 彼は真夜中にもかかわらず、ふたりを引き取って、その打ち傷を洗ってやった。そして、その場で自分も家族も、ひとり残らずバプテスマを受け、

16:34 さらに、ふたりを自分の家に案内して食事のもてなしをし、神を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

このような中でもパウロとシラスが獄の中、痛む打ち傷をさすりながらも神様に祈り、賛美できたのはどうしてでしょうか。そして、神様はその賛美と祈りに応えてくださり、地震が起こり、獄の扉は開き、しかし囚人は逃げず、看守と家族とが救われるという目覚ましい救いが起きました。凶悪犯であろう囚人はパウロとシラスの敬虔な姿勢と、それにお答えになられる神様の御業とに圧倒されました。そして誰一人として脱走する者はいませんでした。神を信じる者の生命線は、いつも神様ご自身です。目に見えるどのような状況にもかかわらず、世界の森羅万象のすべてをご支配なさるお方が私たちと共におられるのであれば、私たちは何を恐れことがあるのでしょうか。

神様は、兄弟たちに裏切られ、奴隸として売り飛ばされたヨセフを用いて獄の中からエジプトの宰相とならせることが出来になります。そして獄の看守をして、囚人に「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と言わせる主客転倒の出来事を成し遂げることが出来るのです。

1:1 キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから、ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督たちと執事たちへ。

1:2 わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

1:3 わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、

1:4 あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、

1:5 あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあづかっていることを感謝している。

パウロにとっては、自身が迫害の中にあり、獄の中にあることはさほど大したことではなく、しかし自分の苦しみや悲しみを通してであっても、一人でも多くの人たちが救いに導かれ

ることを願っていました。何か喜ばしくないことが起こったとしても、神様は全ての機会を働かせて益と変えてくださる。そしてその中で信じる人たちを導き、得させてくださった生ける神様に感謝をささげ、そのかけがえのない救われた一人一人を思うごとに感謝が湧きあがる。自身の苦しみの出来事などひと時の産みの苦しみにすぎず、それによって生まれてきた人たちのことを思うと感謝がこみあげてくる。そしてその生み出された聖徒たちのためにいつも喜びをもって祈り、それらの人たちが救いの最初の日から今日に至るまで変わることなく福音にあずかり、福音の恵みに生かされ、福音にふさわしく生かされていることを知るに、神様への感謝がほとばしり出るのです。

このようにパウロは、福音にあずかる人たちのためならば、自らの苦しみを少しもいとわない人でした。むしろ苦しみをもチャンスとして感謝の祈りをささげる人でした。この苦しみは決して苦しみのまま終わるものではないと信じる人でした。

1:6 そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。

愛するピリピの地に、良いわざを始められる方がおられる。

私たちの人生の中に、良いわざを行ってくださる方がおられる。苦しみ、どん詰まり、窮し、落ち行くがままの人生ではない。悲しみがどんどん増し加わり、破れがどんどん大きくなり、もう落ちるだけの人生ではない。私たちの中には良いわざを始められた方がおられる。そう私は確信し、私の心を説得する。私たちのうちには、良いことを始められるお方がいらっしゃる。

「良い」という言葉にも、いろいろな意味があるようです。良い、役に立つ、一人一人の目的を満足させる、ぴったりと適合する、利益がある、健全である、肥沃で肥えている、新しいものを生み出す温床となる、幸せである、道徳的に正しい、ちょうどまさに、正確に、親切、寛大、分かりやすく明快、完全、(神の)本質的な良さ、等々、本当にいろいろな意味があります。こういうよいことを始めてくださる方が、キリストの日までに、それを完成させてくださるのです。

キリストの日とは何でしょうか。それはいつなのでしょうか。それは再臨の日でしょうか。そうであればいつかは分かりませんが、主の時があるということが言われているのではないでしょうか。そして私たちの忍耐も悲しみも不安も、限られた時の中のことであることが分かるのではないでしょうか。

1:6 そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。

私たちが獄に閉ざされるようなことがあっても、神様は良きことを始めてくださいます。そ

して時にかなってそれを完成させてくださいます。

神様は私たちのどんな状況の中でも私たちを見放さず、私たちを用いてくださいます。私たちのうちにあってよいことを始められ、良きことを見せてくださり、それは幸いな神様の深いお取り計らいと、希望と力に満ちた対処であり、私たちの中で良き業をもって常に望んでくださることを信じましょう。そしてイエスキリストの時、すべてを完成させてくださいます。どういう意味だろうと分からなかったことが完成の後に分かるようになる、そのイエスキリストの日がやってきます。

今は獄の中にあろうとも、失意の中にあろうとも、良き業を主は始めてくださいます。そしてすべてを完成させてくださる主の樋川卓利たちの前には用意されています。喜びと感謝とを神様に捧げ、このような大変な時であるからこそ救われる方々のために祈り、その私たちの労苦の結晶である救われた方々のためにとりなし祈り、さらに続く世代に救いが及ぶことを信じて祈り続けようではありませんか。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。獄中、困難の中にあるパウロからの力強い励ましと力づける言葉、信仰の言葉をありがとうございます。私たちは神様の恵みと平安を頂き、福音の良き知らせにあずかっています。私たちのうちには善いわざを始めてくださり、かつそれを成し遂げ完成させてくださるお方がいらっしゃることを教えられ、感謝いたします。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン